



題未定



27can

うちには夕さんがいる。私が夕子で、彼女は夕さん。私にそっくりの、とっても綺麗な女の子だ。勿論、それは間接的に私は美人だと言っているのだが、不肖二つ下の弟は、何故か私が確信の下、そのように表明すると、アイドル雑誌を私に向けて、寂しげな笑みを浮かべやがるのだ。

眼だって、鼻だってほぼ似たような位置に配しているではないか。

審美眼の足りない、照れ屋の弟である。

父は中小企業のサラリーマン、母は専業主婦だったのだが、先月より、週に三日のパート、スーパーマーケットでレジ打ちをしている、世はなべて厳しい。ボーナスが減ったのだ。

さて、夕さんとは何者なのか。

ひょっとして、私は一卵性の双子で、出産時に一人が亡くなってとか、そんな哀しい話がという、ないない、と母がぱたぱたと手を振ってそれを否定する。はっ、ひょっとして、これが座敷童子というやつ。でも、田舎の名家ならともかく、新興住宅地の角っこであり、なによりも、うちは、それほど裕福でもなんでもないのだ。

「ね、夕子。テレビつけて。面白いのやってるよ」

半透明の夕さんは、靄みたいなもので、実体が無い、だから、テレビのリモコンの操作が出来ない。テレビをつける。長年の付き合いだ、チャンネルなんか、言わなくてもわかる。

テレビでは漫才をやっていた。

「うまいこと言うよね、あはは」

足をバタバタさせ笑う。ちょっと、お姉さん風を吹かせる、でも、ちょっと、泣き虫の、そう、夕さんはうちの家族なんだ。

「おーい、夕子、夕。早く晩ごはんを食べなさい」

「ほーい。夕子、晩御飯だ」

夕はふわりと立ち上がると、夕子の隣へ駆け寄った。

「なんだ、難しそうな本を読んでいるなあ」

「読んでないよ、読もうとテーブルに置いただけ」

夕子は疲れたように言うと、よっこらしょ、呟きながら立ち上がる。

「なんだよ、十代後半、これから花を咲かせましようってのが、よっこらしょってさ」

夕は気楽に笑うと、夕は夕子の手を握る、ふぁっとその手がすり抜けた。

夕は一瞬俯いたが、にっと夕子に笑いかけた。

「ま、しょうがないよね」